

謝靈運の『山居賦』について

安 藤 信 廣

一

宋の景平元年（四二三）秋、謝靈運は故郷の会稽始寧県に隠退し、その地に山居をはじめた。中央を出され、永嘉郡守に着任してから、わずかに一年後のことである。その行為が奇矯なものだったことは、『宋書』本伝に、

在郡一周、稱疾去職。從弟晦・曜・弘微等並與書止之、不從。

（郡に在ること一周、疾^{やま}ひと称して職を去る。從弟晦・曜・弘微ら、並びて書を与へてこれを止むるも、従はず。）

と記されていることから、想像できる。謝靈運の資性は「偏激」⁽²⁾（狭く激しやすい）だったというが、永嘉への左遷という情況のもとでも、それは変らなかつた。

困難を増してゆく政治的立場に追われ、それ以上に「偏激」な自己の資性にふりまわされて、靈運の内面は日毎に危うさを増していた。個々の行為の選択を超えて、自己の

生全体をどのように決定するか。その模索のなかで山居は選ばれた、と私は思う。単なるわがままでも、政争に敗北したための一時避難でもない。そしてなお山居のなかで、模索はつづいていたと思われる。『山居賦』⁽⁴⁾は、対自的なその模索の表現であり、また方法だったと私は考えたい。『山居賦』は、謝靈運が始寧に退居した翌年か翌々年、つまり元嘉元年（四二四）またはその二年（四二五）に完成したと考えられる。作品は『宋書』本伝に、詳細な自注とともに収められている。そこには賦の成立の経緯も明確に記されている。

靈運父祖並葬始寧縣、并有故宅及墅、遂移籍會稽、修營別業。傍山帶江、盡幽居之美。與隱士王弘之・孔淳之等縱放爲娛、有終焉之志。……作山居賦并自注、以言其事。（靈運の父祖は並びて始寧県に葬られ、并せて故宅及び墅有り。遂に籍を会稽に移し、別業を修營す。山に傍ひ江を帯び、幽居の美を尽くす。隱士王弘之・孔淳之らと縱放して娛しみを為

し、終焉の志有り。：『山居賦』并ならびに自注を作り、もってその事を言ふ。）

父祖の墳墓の地にひきこもることが、謝靈運にとって独自の意味をもつ行為だったのであろう。退居するにあたって、三十九歳の靈運が「終焉之志」を持ったというのも、決意の重さを示している。このようにして始められた謝靈運の山居の内的課題とその展開を、『山居賦』の構成に沿って考察したい。

二

『山居賦』は、序文とともに、七百数十句に及ぶ長大な作品である。欠脱が多く、正確な句数を定めることはできない。全体は四十六の段落から構成されている。自注ではそれを章と呼んでいるので、本論でもこれを「章」と呼ぶ。四十六章を、本論では六つの大段落に分けて把握したい。それを仮に「段」と呼ぶ。『山居賦』の全体像を序文と六つの段に区分して考えるものとして、以下に章・段の關係と大まかな内容を提示する。

〔序〕

隱遁者の住まいには、巖棲・山居・丘園・城傍の四種がある。山居する喜びを飾らずに賦す。

〔第一段〕（一章—三章）

榮名にこだわらずに退隱する古人の生き方に共感する。だが仲長統以下の住まいには欠けた所がある。

〔第二段〕（四章—十四章）

わが祖謝玄の退隱こそ、時宜を得て、住まいは自然の美に満ちていた。遺訓をあおいで、この地に退居する。

〔第三段〕（十五章—二十六章）

父祖以来の旧宅は江（浦陽江）に面し、新しい樹園もそなわり、住むのに最もふさわしい。草木が茂り、動物も豊かだ。全ては自然の道理に従っている。

〔第四段〕（二十七章—三十二章）

全ての生物は生きるとを求めていると悟る。万物を救うという仏の教えを承けて、一寺を創建する。

〔第五段〕（三十三章—三十九章）

北山の旧居と南山の新居は、水路が通じている。南山から北山に帰って行くと、山川・草木それぞれに美しい。

〔第六段〕（四十章—四十六章）

自分は病弱で、様々の薬を求める。生に固執する私のこのささやかな心を基にして、全ての命あるものを救おう。以上、靈運の真率な姿勢が見えよう。他方また序文の中に、「意實言表、而書不盡」（意実にして言表はるるも、而

も書は尽くさず」と言う。言葉の有限性を述べたものだが、逆にその有限の言葉によって「意」をとらえようとする自負の表現でもある。言葉の力を杖として自己の内面を探ろうとする意志が、冒頭から賦の基底に据えられている。

三

短い序文の後の第一段では、語りの主体である「謝子」が現われる。謝子は、病疾をかかえながら古人の書を「山頂」で読み、賦を語りはじめ

第一段一章では、黃帝や堯にとって、山川の中にこそ眞の住まいがあったこと、文成公張良や陶朱公范蠡が地位と名声を捨てて退隱したことを、たたえる。注目されるのは、それらに固執して身を滅した李斯・陸機との比較に於いて張良らがたたえられる点である。

判身名之有弊 身名を判ちてこれ弁有り

權榮素其無留 榮素を権りてそれ留まる無きは

執如牽犬之路既寡 牽犬の路の既に寡く

聽鶴之塗河由哉 聽鶴の塗 何にか由ると執如ぞや

処刑されるときに、李斯は犬をひいて獵をする喜びを思い、陸機は故郷の華亭で鶴の声を聞く喜びを思ったという。地位に固執した二人のその無残な死と、張良・范蠡の隱遁を

比べれば、どちらが良いか。答えは明白だが、その問いを改めて自他に発する靈運の内面には、実は自己が李斯と陸機の側に属しているという知覚が、重く凝固していたのであろう。権力と名声への固執は愚劣である。だが、その愚劣さに救いようもなく呪縛されている自我がある。その自我に向かって、答えの明らかな問いをことごとく発するところに、自己の「偏激」な資性への暗い絶望と、にもかかわらずそれを組み伏せようとする激越な意志が見られる。

つづいて第一段二章と三章では、聖人が民衆に教えた住居の優れていたこと、後代の漢の仲長統、魏の応璩らの山居・林園には欠点があったことが述べられる。

第二段ではそれにひきかえて、祖父謝玄の隱棲のみごとさが語られる。(四章)

覽明達之撫運 明達の運を撫するを覽るに

乘機緘而理默 機の緘ざし理の黙するに乗ず

指歲暮而歸休 歲暮を指して帰休し

詠宏徽於刊勒 宏徽を刊勒に詠ず

狹三閭之喪江 三閭の江に喪ぬるを狭しとし

矜望諸之去國 望諸の國を去りしを矜ぶ

選自然之神麗 自然の神麗なるを選び

盡高棲之意得 高棲の意得を尽くす

「明達」は、謝玄をさす。運命の暗転によって謝玄が退居したことを、自注では次のように説明している。

余祖車騎建大功淮・肥、江左得免橫流之禍。後及太傅既薨遠圖已輟。於是便求解駕東歸、以避君側之亂。廢興隱顯、當是賢達之心。故選神麗之所、以申高棲之意。經始山川、實基於此。

（余が祖 車騎、大功を淮・肥に建て。江左 橫流の禍を免かるを得たり。後 太傅の既に薨ずるに及び、遠圖 已に輟む。是に於いて便ち駕を解きて東に帰るを求め、以て君側の乱を避く。廢興・隱顯は、當に是れ賢達の心なるべし。故に神麗の所を選び、以て高棲の意を申す。山川を經始するは、實に此に基いす。）

「三閭」大夫（屈原）の入水を批判し、「望諸」侯（楽毅）の国を去ったのを尊んだ謝玄の退隱は、「神麗」の地を選び、「高棲」の意を尽くしている。その祖父の行為が、危機にある靈運にとって大きな意味を持った。

謝靈運の山居は、祖父の退隱を繼承する行為だった。むしろ、無意識のうちに模倣する行為だった。靈運が生まれた直後に、父謝瑛は亡くなっている。四歳のときには、祖父も他界した。⁽⁵⁾ 自注で「廢興・隱顯は、當に是れ賢達の心

なるべし」と亡き祖父をたたえるとき、自己の行為の規範として祖父をみつめる靈運の視線があらわになる。

様々の危機に際して、靈運はたびたび祖父を想起している。⁽⁶⁾ 酷薄な政争の中で敗北し、中央から疎外され、永嘉郡守に遷されるという情況のもとで、謝靈運が自らの行為の規範を亡き祖父に求めたのは、むしろ当然だった。

謝靈運が「述祖德」（祖德を述ぶ）詩二首を制作したのも、『山居賦』制作の時期と重なる。その序に言う。

太元中、王父龔定淮南、負荷世業、尊主隆人。逮賢相祖謝、君子道消、拂衣蕃岳、考卜東山、事同樂生之時、志期范蠡之舉。

（太元中、王父 淮南を龔定し、世業を負荷し、主を尊び人を隆んにす。賢相の祖謝し、君子の道消ゆるに逮んで、衣を蕃岳に払ひ、卜を東山に考ふ。事 樂生の時に同じく、志 范蠡の挙を期す。）

こうした祖父謝玄の隱退の繼承・模倣は、謝靈運にとって苦い行為でもあった。肥水の戦い（三八三）の赫赫たる勲功、ひきつづく淮北の経営など、謝玄の存在の巨大さは誰もが知りぬいている。その勲功があればこそ、彼の勇退は尊敬された。だが謝靈運の隱退には、その前半の勲功がまったく欠けていた。永嘉に出される直前の靈運について、

『宋書』本伝は次のように記している。

靈運爲性偏激、多衍禮度。朝廷唯以文義處之、不以應實相許。自謂才能宜參權要、既不見知、常懷憤憤。

(靈運の性たるや偏激にして、多く礼度に愆ふ。朝廷唯だ文義を以てこれに処し、応実を以て相ひ許さず。自らは才能宜しく權要に參すべしと謂へども、既に見知せられず、常に憤憤を抱く。)

「自らは才能宜しく權要に參すべしと謂う」という自己認識のなかに、肥大化してゆく自負心を見ることができ。その影には祖父の名声への憧れがあっただろう。そして結局のところ、何の勲功も立てぬままに自ら退隱することになったとき、祖父の行迹の繼承は苦いものになっていた。続いて語られる次の十句は、靈運の内面の蔽しさを下地にしている。(五章)

仰前哲之遺訓 前哲の遺訓を仰ぎ

俯性情之所便 性情の便とする所を俯す

奉微軀以宴息 微軀を奉じて以て宴息し

保自事以乘閑 自ら事ふるを保ちて以て閑に乗ず

愧班生之夙悟 班生の夙に悟るに愧ぢ

慚尚子之晚研 尚子の晩く研むるに慚づ

年與疾而偕來 年は疾ひと偕に來たり

志乘拙而俱旋 志は拙に乗じて俱に旋る

謝平生於知遊 平生を知遊に謝し

棲清曠於山川 清曠を山川に棲まはす

祖父をここでは「前哲」と呼ぶ。その「遺訓」によって「自事」(自らの心に事える)することを選ぶ。そう言いながら、「尚子」や「班生」に対して恥じいる自己を語る。祖父の行迹と自己を比較する意識が見えよう。「年は疾ひと偕に來た」という時間への焦慮も、潜在的には、祖父の人生の軌跡と比べての焦燥であった。「志は拙に乗じて俱に旋る」というのは、隱遁を決意した自己のせい、いっばいの肯定であるが、他方、拙劣な自己の生への苦々しい悔恨ともとれる。

だがそうした錯綜する内的情況をかかえたまま、むしろそうであればこそ、靈運は「清曠を山川に棲まはす」ことによって、自己を克服する可能性に賭けようとした。「清曠」の語は、『山居賦』と同時期の作「田南樹園激流植援」(田南に園を樹て流れを激きて援を植う)詩にも見える。

中園屏氣雜 中園 氣雜を屏け

清曠招遠風 清曠 遠風を招く

わが園からは「氣雜」(汚れや騒がしさ)をしめ出し、「清曠」(清く広やか)なるこの地に遠き風を招きよせる。「清

「曠」は、空間の清澄と広闊を言う語であろう。山居という場のもつ、都市とは異質の、非日常的な清浄さである。

だがまた「清曠」の語は、永嘉左遷の途次に作られた「過始寧墅」（始寧の墅に過る）詩にも既に現れている。

溜磷謝清曠 溜磷 清曠に謝し

疲爾慚貞堅 疲爾 貞堅に慚づ

汚れすりへり、疲れやつれた私は、「清曠」（清く広やか）

で「貞堅」（貞しく堅固）な人に対して恥ずかしい。――

「清曠」は、空間の形容ではなく、精神の状態を言う語と見られよう。『文選』向注には、「言我隨物遷變、故云慚謝清曠貞堅之士也」（我物に随つて遷変するが故に清曠貞堅の士に慚謝すと云ふを言ふなり）と解説する。靈運にとつて「清曠」とは、外在する自然の状態をさすとともに、また内在する精神状態をいう語でもあった。『山居賦』の「清曠」は、その両義を兼ねたような用いられ方をしている。

しかも明らかに「過始寧墅」詩では自己は「溜磷」「疲爾」であり、「清曠」に恥じいる側であるのに対し、『山居賦』では、自らが「清曠」の側に立っている。政治的には危うく、また現実との間の平衡を欠いた自負心に苦しみ、すりへってしまった自己が「清曠」であり得る場――それが「山川」だった。

四

自らの精神を「清曠」に保つことが、事実として謝靈運に可能だったかと問うことは、『山居賦』の批評とは次元の違う問題である。『山居賦』それ自身は、「常に憤憤を懷」いていた自己が「清曠」の精神を志向し得たその次元に於いて語られている。「清曠」を志向する精神のまなざしで「山川」をひたすらに凝視することが、『山居賦』の表現方法の基礎であった。また、その凝視の上に立つて表現を創出して行くことが、「常に憤憤を抱」いてきた自己の超克への道程でもあった。

第二段の五章で「清曠を山川に棲まはす」と述べたあと、つづく六章から山居のさまを具体的に語り出す。始寧の別墅は、湖をはさんで、北側に祖父以来の旧宅があり、謝靈運は永嘉左遷の途次にそこを改修・拡張していた。賦中では「東山」という祖父以来の呼び方でそこを呼ぶ場合もあるし、「北山」という呼び方を用いることもある。湖の南側にあたらしく開いた宅地や園田を「南山」と呼ぶのに対するためであろう。六章から十四章まで、南山・北山を含む全体としての山居を中心に、その周囲の景物を描く。あわせて八つの章を費して羅列されてゆくその叙景には、

固有名詞を重ねただけの表現や、それに近い抑制された表現も多い。「山川」の姿態の静と動を、基調としての抑制とそれをふりほどいた激発によって描きわけける。八章の後半は、その激発にあたる。

嶠崩飛於東峭 嶠は東峭に崩飛し

檠傍薄於西阡 檠は西阡に傍薄す

拂青林而激波 青林を払って波は激し

揮白沙而生漣 白沙を揮って漣は生ず

「嶠」「檠」は、山居の「近き南」の江辺にあつた断崖と巨石を言う。両者の表現そのものが大胆で動的であるが、その崖と石とによって青林を払うように波が激し、白沙を揮うようにさざなみが生じているという表現の生氣と華麗にはより目ざましいものがある。

叙景の生動性が、羅列的表現と競合しつつ高まってゆく、と言えようか。第三段（十五章—二十六章）は、「北山」の「南術」と呼ばれる旧居を中心に語られる。十五章ではその門前を流れる浦陽江を次のように表現している。

湯湯驚波 湯湯たる驚波あり

滔滔駭浪 滔滔たる駭浪あり

電激雷崩

飛流灑漾

電のごとく激し雷のごとく崩れ

飛流 飛流 灑漾る

凌絶壁而起岑 絶壁を凌いで岑を起こし
横中流而連薄 中流に横ちあふれて薄に連る

始迅轉而騰天 始め迅やかに転じて天に騰り

終倒底而見壑 終に底を倒して壑を見はす

浦陽江のつね日ごろの様子の上に、いわゆる海嘯について言う場面である。逆流する潮の巨大な力を強い線で描いている。「岑を起こし」という垂直の動きと「薄に連る」という水平の動きを対比させて、意識的な再構成が貫かれてもいる。「天に騰り」「壑を見はす」という上昇と下降の動きの表現も、また同じである。動態を絵画的手法で言葉に表現する執拗な試みを通じて、謝靈運は実は自らの視野を切り開いている。その意味で、『山居賦』は叙景の実験場である。

表現の意欲と表現の実現の困難がせめぎあいながら生動性が相乗してゆく。二十二章がその例となろう。「北山」の木を描く所である。

榦合抱以隱岑 榦は合抱にして以て岑を隠し

杪千仞而排虛 杪は千仞にして虚を排しひらく

凌岡上而喬竦 岡上を凌ぎて喬竦し

蔭澗下而扶疏 澗下を蔭ひて扶疏たり

沿長谷以傾柯 長き谷に沿ひて以て柯を傾け

攢積石以插衢 積める石を攢^{おほ}ひて以て衢^{みち}に挿^さしいづ

華映水而増光 華は水に映じて光を増し

氣結風而同敷 氣は風を結んで回り敷く

四言が六言句に展開した瞬間に、生氣にみちた、しかしあくまでも靜謐な表現の世界が広がる。たとえば「杪は千仞にして虚^{そら}を排^おしひらく」という表現は、大木を下から見あげたその視線の果てに、こずえが虚空をおしひらいてゆくように伸びる姿を、確實に言葉に実現している。「華は水に映じて光を増し」ているという表現は、水辺の花がその姿を水面に映し、また水面に反射する光がもとの花の輝きを増す瞬間を、結晶させている。

『山居賦』の相当な部分がこうした叙景によって占められる。靈運はなぜここまで、叙景に執拗に没入したのか。靈運にとって山居という行為そのものが、「常に憤懣を抱」いていた自己の超克のためであっただろうが、その場に於ける表現も、より鋭い自己超克の行為だった。煩悶しつづける自我を自ら救うために山居は選ばれたが、その救済を实体化し得るのは、表現だった。彼は山居の開始を「清曠を山川に棲まはす」と語った。山居の清浄な空間、その場の非日常的な力が自らを解放することを期待した言葉である。だが、それがこのように表現された瞬間、逆に「山川」

を「清曠」なる心の中に内面化する行為が始まっている。精神の「清曠」の中に「山川」の美を内在化させる行為が始まっているのである。言葉による表現を通じて、靈運は自然の美を内面化しつづけてゆく。

謝靈運が〈理〉に固執した人間であることは、よく知られている。存在の道理に直截にわけ入ろうとする性向は、彼の山水詩に顕著に見出される。だが、そのままの即自的な〈理〉への没入は、『山居賦』では抑えられていて、作品の主要な部分は山水の〈美〉の描写という形になっている。それは何よりも山水の〈美〉の内面化が、靈運の精神をみたし、煩悶からの超克を可能にしたからである。彼にあっては、〈美〉を内在化することによって、〈理〉が深化する。それが彼を徹底した「山川」の叙景へとつき動かした。〈理〉が自らの姿を隠し終えた所に、〈美〉は誕生する。そのような対象として山水の〈美〉を凝視し、その表現に没入したのである。靈運の側からすれば、〈美〉の凝視と表現が、新しい〈理〉の把握を可能にしたのだ。自然描写と見える行為が、実は新たな認識を開く過程でもあったのだ。

五

『山居賦』は展開の過程で叙景から遠心的に哲理を析出させてゆく。第四段から後は、仏教の哲理を語る場面が多くなる。第三段の終りの部分（二十四章—二十六章）で「北山」の魚・鳥・獸などを列挙したのを承ける形で、第四段は次のように始まる。（二十七章）

緡綸不投

緡綸は投ぜず

置羅不披

置羅は披かず

磻弋靡用

磻弋 用いる靡く

蹄筌誰施

蹄筌 誰か施さん

鑑虎狼之有仁

虎狼の仁有るに鑑み

傷遂欲之無崖

欲を遂ぐるの崖無きを傷む

顧弱齡而涉道

弱齡よりして道に渉るを顧みるに

悟好生之咸宜

生を好むの咸な宜しきを悟る

率所由以及物

由る所に率ひて以て物に及ぼせば

諒不遠之在斯

諒に遠からずしてこれ斯に在り

撫鰻鰕而悅豫

鰻鰕を撫して悦ぶし

杜機心於林池

機心を林池に杜さん

山川にみちる動物たちを畏にかけたりはしない。少年のころから仏道に足をふみ入れたことをふりかえると、生き者が生をいとおしむことの全てが正しいと悟った。そのささやかな思いを万物に及ぼせば、仁愛というものも遠くでは

なく、今ここにあると言えよう。——「虎狼」に仁があるというのは『莊子』天運篇の語であり、自注にも出典を明示するが、それを自らの認識とし得たのは、『山居賦』のここまでの表現行為そのものによる。山川を凝視し、山川にみちる生命を凝視し、それを表現しつづけた結果として訪れた啓示なのだ。「生を好むの咸な宜しきを悟る」という言葉が重いのは、そのためである。自注に言う。

自弱齡奉法、故得免殺生之事。苟此悟萬物好生之理。易云、「不遠復、無祇悔。」庶乘此得以入道。

（弱齡より法を奉ず、故に殺生の事を免る。苟に此れ万物好生の理を悟る。易に云ふ、「遠からずして復る、祇れ悔いること無し」と。庶ひねがはくは、此れに乗じて以て道に入るを得んことを。）

山居の万物を羅列し、またその〈美〉を描いてきた『山居賦』は、その果てに「萬物好生」の〈理〉をひきよせる。靈運はそれをさすがに「道に入るを得ん」と願う。

注意せずにいられないのは、『山居賦』のこうした哲理が、同時期に制作された山水詩のそれと、性格を異にしている点である。「從斤竹澗越嶺逕行」（斤竹澗より嶺を越えて逕行す）詩の末に次のようにある。

情用賞爲美 情は賞を用て美を為す

事味竟誰辨 事味くして竟に誰か弁ぜん
觀此遺物慮 此れを觀て物慮を遺れ

一悟得所遣 一たび悟りて遣る所を得たり

ここでの〈理〉は、徹底して内向的である。「物慮」を忘れ、是非を「遣る所」を手に入れたというのは、他者との（直接的な）相互關係を持たない。「悟」ったことの中味は、自己の主觀に終始している。また「石壁精舎還湖中作」(石壁精舎より湖中に還るの作) 詩の末にも、同じ性格の〈理〉が語られる。

慮澹物自輕 慮ひ澹らかなれば物自から輕く

意愜理無違 意愜へば理違ふこと無し

寄言攝生客 言を寄す攝生の客に

試用此道推 試みに此の道を用ひて推せ

これが仏教の諦觀を語っているとする衣川賢次氏の指摘がある。⁽¹⁰⁾従うべきであろうが、その諦觀の方向性を言うならば、内向的と言えよう。

他方「山居賦」は、同じく仏理を語るにしても、それを「萬物」の救済の〈理〉として語ろうとする。そのような意味で、『山居賦』がひきよせている〈理〉は、外向的な性格を持つ。(もちろん、内向的と言ひ外向的と言ったのは、方向性を指すのであって、「優劣」は全く問題にしていない。)二十八

章で次のように言うのは、より広く外に向かつて開かれて
いるだろう。

敬承聖誥 敬しんで聖誥を承け

恭窮前經 恭しく前經を窺ふに

山野昭曠 山野は昭曠にして

聚落羶腥 聚落は羶腥なりといへり

故大慈之弘誓 故に大慈の弘誓は

拯羣物之淪傾 群物の淪傾を拯はんとす

この章から、山居の意味そのものが、謝靈運にとって変化してくるのである。聖なる仏の教えをうけ、經典をうかがってみると、「山野」は「昭曠」(清らかで広い)だが、「聚落」は「羶腥」(なまぐさい)であるという。そこで仏は大慈悲心に基いた弘大な誓いを立て、万物、ことに人間の淪みゆくのを救おうとした。——靈運は、それにならおうとする。出発点において自己救済のための山居だったものが、ここでは「群物の淪傾を拯」うためのものに意味が変化もしくは拡大している。

その具体化として靈運が別墅の「北山」(東山)の「一谷に開いた寺が、石壁精舎だった。二十九章はその創建を述べ

る。
爰初經略 爰に初めて經略し

杖策孤征 策を杖つきて孤^{ひと}り征^ゆく

入澗水淨 澗^{たに}に入りて水^{みづ}を渉^{わた}り

登嶺山行 嶺^{たに}を登りて山^{やま}を行^いく

陵頂不息 頂^{たて}を陵^{しほ}ぐも息^{いき}はず

窮泉不停 泉^{いづみ}を窮^{きつ}むるも停^{とど}まらず

櫛風沐雨 風^{かぜ}に櫛^{くし}けづりて雨^{あめ}に沐^{もく}し

犯露乘星 露^{つゆ}を犯^かして星^{ほし}に乗^{のり}ず

研其淺思 その浅き思^{おも}ひを研^ひぎ

罄其短規 その短^{つたな}き規^{はかりど}を罄^つくさん

こうして歩きまわった果てに、良い場所を選び精舎を建てる。次々に經台・講堂・禪室・僧房を設けたとあるから、小とはいえ本格的な寺院である。そこに疊隆・法流らの僧を招いたことは、三十章に述べられる。精舎を建立すべく山野を跋涉する靈運のすがたは、輝きにみちている。『山居賦』の文脈に於いては、それは「羣物」を救うための、外に向かつて開かれた認識に基く行為だった。

六

第五段(三十三章—三十九章)では、「南山」に新しく開いた居宅が描かれ、また「南山」及び「北山」の間の自然描写がくりひろげられる。改めて山居の「美」が表現される

ことによって「理」の新しい顯現が可能になる。「山川」のたたずまいを再び凝視することが、新たな「理」の展開の力になってゆく。言葉の力への自負と、表現への真率な努力が、ここでも貫かれる。

第六段(四十章—四十六章)は、仏理への傾倒を語るが、それは第四段のくりかえしではない。自己の弱さと迷妄をふまえながら、逆にそれを力に自他を救おうとするのである。第四段で「萬物」を救う「理」として外向きに仏法をとらえていたものが、ここではその「萬物」の中に自己を見出している。いや、表現のすじみちに從えば、自己の迷いをみつめなおす内向的なまなざしを通じて、外向的に「萬物」を救おうとする仏の「理」の意味をとらえかえすのである。第六段の冒頭、四十章は、自己の迷いと弱さをとらえて次のように始まっている。

弱質難恆 弱質 恒^{つね}なり難^{がた}く

類齡易喪 類齡 喪^{なげ}び易^{やす}し

撫鬢生悲 鬢^{かん}を撫^{なで}しては悲^{かな}しみを生^はじ

視顏自傷 顏^{かんげ}を視^みては自^{みづか}ら傷^やむ

近付きつつある死への恐れは、『山居賦』の冒頭から、一つの底流だった。語りの主体「謝子」は「疾」を抱いていたが、「弱質」は再び噴出する。つづいて四十章では、薬

をさがし求めるありさまを語る。そして四十一章では、冬の「安居あんこ」のさまを述べ、こう言う。

乘此心之一豪 此の心の一豪に乗じて

濟彼生之萬理 彼の生あるものの万理を濟すくはん

一すじの毛のように弱くかすかなわが心に乘じて、生あるものの無数の「理」を救おう。——死を恐れて業をさがしつづける自分をのりこえる形で、万物の存在理由、または存在理由を持つ万物を救おう、と言う。自己の弱さを逆転して力にしようとするのは、賦の志向する所が自己超克だったからだ。

四十二章では、より具体的に、自らの心の動きが語られる。

好生之篤

生を好むの篤きは

以我而觀

我を以て観みん

懼命之盡

命の尽くるを懼おそれ

客景之歡

景の歡よろこびを客きやくる

分一往之仁心 一往の仁心を分かち

拔萬族之險難 万族の險難を抜かん

生きるものたちが生をいとおしむ深さは、自分自身の姿を見て知ることができる。死を恐れ、生の歓楽をむさぼる自分の姿、それがまた万物の姿でもある。だから、わが一す

じの仁心を他にも分かち、全ての生ある族うゑみらの苦しみを取りのぞこう。——つづけて自注は言う。

云物皆好生、但以我而觀、便可知彼之情。

（物皆生を好む、但だ我を以て観れば、便ち彼の情を知るべきを云ふ。）

自己の生命に固執している自己——それを否定的に迷妄としてだけ見る視点を離れ、それによって自己と「萬族」との一体性をとらえ自我と他者をもに救おうと言うのである。

靈運は自己の認識を開くことに対して、このように懸命であった。かつその実現は、表現への長い努力に支えられていた。四十四章では「援紙握管」（紙を援もとり管くだを握り）して「山樓」する己を描く。

研精靜慮 靜慮を研精し

貞觀厥美 その美を貞觀しんかんす

「靜慮」と「貞觀」を重ねて結実する表現は新たな認識の啓示でもあった。

自意識に煩悶する自己をのりこえることを潜在的な課題として山居は開始され、『山居賦』は自己超克の模索を展開した。叙景を方法としながら、表現の展開の彼方に新しい認識の開かれることを求めて、靈運は賦の制作にとりくん

だと思われる。外へ広がる視野がついに万物の存在理由を
実感させ、彼の認識は飛躍し得ただろうが、その思想への
評価は本論の問うところではない。表現を通じて認識を開
いてゆく、その激しい意欲と営為に注目したいと思うの
だ。謝靈運の表現行為への意欲は、彼の「褊激」の一局面
と見るべきだろう。山居を通じて、また『山居賦』の表現
を通じて、現実への独自の意志的関わりとして、靈運は仏
教の哲理をとらえかえした。山居という場の力と、表現の
解放力とを、『山居賦』は示しているであろう。しかし逆
に、山居を離れて政治社会にもどるとき、靈運がさらされ
る危機の深さをも、この賦は示している。

注

- (1) 『宋書』卷六十七・謝靈運伝。
- (2) 『宋書』謝靈運伝に、「靈運爲性褊激、多愆禮度。」とあるの
による。(後出)
- (3) 『宋書』謝靈運伝に、「少帝卽位、權在大臣。靈運構扇異同、
非毀執政。司徒徐羨之等患之、出爲永嘉太守。」などとある。
- (4) 『山居賦』は、『宋書』謝靈運伝(中華書局版)により、顧
紹柏『謝靈運集校注』(中州古籍出版社)によって校した。ま
た森野繁夫『謝康樂詩集』(白帝社)にも注釈とともに収めら
れており、多大の恩恵を被った。
- (5) 顧紹柏『謝靈運集校注』の附録二「謝靈運生平事迹及懸年」

の説。

- (6) 義熙十三年(四一七)、北伐に出た劉裕を慰勞せよという
氣のそまぬ朝命を受けたとき、『撰征賦』の中で謝玄を讃えて
いるのが、一例となろう。
- (7) 森野氏前掲書では「清曠に山川に棲む」と読み、「清曠」を
場所の状態と解しておられるが、後述するように、私はその読
み方及び解釈に従わない部分があった。
- (8) 『大辭林』によれば、「満潮の際に潮流の前面が垂直の壁と
なり、砕けながら川の上流へさかのぼる現象。」
- (9) 小尾郊一『謝靈運の山水詩』(日本中國學會報二十集)、衣
川賢次『謝靈運山水詩論——山水のなかの體驗と詩——』(同三
十六集)などに詳述されている。
- (10) 衣川氏前掲書、一〇五頁など。
- (11) 顧紹柏前掲書、四三一頁などによる。
- (12) 吳功正『六朝園林』によれば、靈雲の別墅は中規模のもの
ということになる(一四頁)が、それは漢代の園林との比較で
ある。

(東京女子大学)